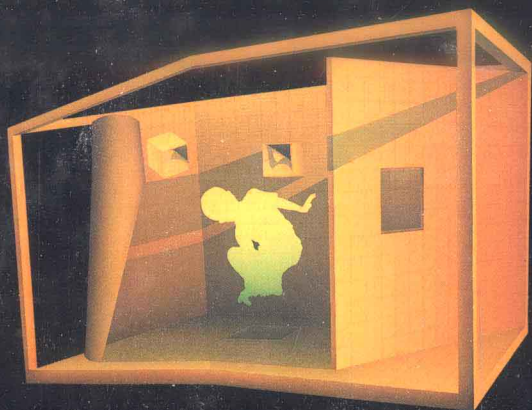


diorama

桐野夏生



ジオラマ

kirino natsuo

新潮
エンターテインメント
倶楽部

桐野夏生

新潮社



ジオラマ

1998年11月20日発行

1998年12月20日 2刷

【著者】 桐野夏生 きりの なつお

【発行者】 佐藤隆信

【発行者】 株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71 振替00140-5-808

【電話】 編集部03-3266-5411 読者係03-3266-5111

【印刷所】 大日本印刷株式会社

【製本所】 株式会社大進堂

© Natsuo Kirino 1998, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-602642-2 C0393

価格はカバーに表示してあります。

ジオラマ*目次

デッドガール	dead girl	7
六月の花嫁	june bride	31
蜘蛛の巣	spider web	65
井戸川さんについて	regarding Mr. Idozawa	77
換れた天国	twisted heaven	113

黒い犬 *black dog*

139

蛇つかい *ophiuchus*

187

ジオラマ *diorama*

199

夜の砂 *night sand*

259

ジオラマ

*dead
girl*

デッドガール

シーツに俯せに押しつけられた時や、仰向けに転がされて男の体重に押しつぶされそうになつて喘いだ時、そのにおいがカズミの鼻先をかすめた。

それは、汚れたシンクの隅の、腐った生ゴミのにおいのもあり、花瓶の濁った水の中でどろどろに溶けた植物の茎のにおいのもありでもあった。カズミはそのたびに顔を背け、少しでも新鮮な空気を吸おうとのけぞりながら口をばくばく開けた。

「あなた、時々すっごく嫌な顔するよねえ」

男が小声で文句を言い、不機嫌そうに身を起こした。故意か偶然か、身を振つた男の手がカズミの頬にびしゃつと当たった。力は籠もっていないものの、掌は分厚くて重い。

「痛っ！」と叫んだカズミは、反射的に両手で顔を庇う仕草をした。

「言つとくけど、わざとじゃないよ」

男は謝りもせず横を向いた。その目にほんの一瞬だけ、嗜虐的な色が浮かぶのをカズミの目は捉える。おとなしいサラリーマンと思っていた男が、急に違う人間に見えた。

「何かさ、俺こう思うんだよね。あなたそんな嫌な顔すんなら、ついてこなきゃいいのにつて」

「ごめん、何か変なおいがするから」

男は顔色を変えた。自分が臭いとなじられたように感じたらしい。カズミは、弁明しようとしたが口を噤んでしまった。同じひとつのベッドの上にも、男と自分の横たわった位置とでは感じ取れるものが違うことに気づいたからだ。そしてそのことが、見ず知らずの男とラブホテルにいる自分と、相手との気持ちの断層を表しているような気がしたからだ。――

「臭くて悪かったなあ」

男は仏頂面のまま、ベッドから降りた。痩せているのに、腰骨に腹の贅肉が被さり、尻の肉がたるんでいる。白い太股に毛ガニのような黒い毛が密生しているのをカズミは無表情に眺めた。まだ三十くらいなのに醜い肉体だと思ふ。いや、この男だけではない。すべての男の肉体が滑稽で醜いのだ。見知らぬ男が裸になるたびに、カズミはつい目を背けてしまう。

「何見てんだよ」

背中に冷えた視線を感じた男が振り返り、劣等感と軽蔑の入り交じった表情でカズミを見遣った。思わず、カズミは身を縮めた。また殴られると思った。だが、男はカズミの怯えを見て、勝ち誇った顔をしただけだった。

今にも「戦争」が始まりそうだ。カズミの考える「戦争」とは、男とのどうしても埋まらない溝。それどころか、海溝ほどに深い隔たりを感じる時の比喩だ。

《ほんとに憎たらしい。こういう瞬間の男って死ぬほど嫌いだ》

カズミはこんな場合に決まって起きる憤怒の感情を持って余し、内心じりじりした。会社では地

味で暗いと噂うわさされている自分の中に、こんな激しい感情があるなんて信じられないような気がした。

男はしばらくベッドの横に突っ立ってカズミの様子を眺めていたが、やがて怒りを振り落とすように言い捨てた。

「何か貧乏臭いんだよね」

「あたしが？」

「そうは言わないけどさ」

「じゃ、どういうこと？」

衝撃を受けたカズミはおずおずと問うた。が、男はわざとらしく首を傾むげる。

「さあね」

《どっちが貧乏臭いのよ。あんたなんか絶対に女にもてなくて、あたしに払うお金だってけちり
そんな奴なのに》

再び激しい感情が渦うず巻いてきたが顔には出さず、カズミは男が緩んだ後ろ姿を見せてバスルームに入っていくところをずっと睨にらみ続けた。貧乏臭い。その一言に打ちのめされたことは認めたくなかった。そして、いつものように、冴さえないと蔑きげすんだ男から金をもらって寝ること自体にひりついた屈辱を感じていることも。

カズミは仰向けに横たわったままサイドテーブルに手を伸ばし、男のタバコを口にくわえた。それから、鼻孔をふくらませてあちこちのにおいを嗅かいでみた。だが、もうあの腐ったようなに

おいはしない。カズミは思わず自分の体のおいも嗅いだ。もしかすると、嫌いな男から金をもらってラブホテルにいる自分から漂ってきたのかもしれないと思いついたからだだった。反省と自己嫌悪。時々湧き上がるこの気持ちちは、カズミを一番萎えさせる。

一刻も早く安全な自分の部屋に帰りたい。あの男はこれから自分に何をするつもりなんだろうか、とカズミは心配になった。そして、どうしてこんな危ない仕事をしているのだろうかとうと自分の心を量りかねるのだった。

便座が跳ね上げられ、勢いよく水を流す音が聞こえてきた。男はシャワーを遣う気らしい。痰を吐く音が聞こえ、カズミは弧を描いた人工的な細眉をひそめた。癪に障った客に時々するように、ポケットの中を探ってやろうかと男の服の在処を目で探す。見るからに安物らしい薄いジャケットは、入り口近くの、茶のビニール張りソファの背に無造作にかけられていた。二人が飲んでビールとグラスが、指紋だらけのガラステーブルの上に残されている。それらを見るとカズミの気がさらに滅入った。

この行為がばれたら何をされるかわからない。が、さつき男が見せた嫌悪と苛立ちの表情を思い出すと、復讐してやらなければ気が済まなかった。カズミはまだ火をつけていないタバコを箱に戻すと、裸のままベッドから降りた。バスルームのほうを窺う。中からは激しいシャワーの音と風呂の湯を出す音が同時に聞こえてくる。

カズミは思い切ってジャケットの内ポケットに手を入れた。金を盗む気はなかった。名刺の一枚でも手に入れてやろうと思ったのだった。名刺を手に入れてどうするかなんて何も考えていな

い。ただ、男が隠そうとしているものをこっそり知ることができればいい気味だと思っただけだ。薄い札入れを取り出そうとしたちょうどその瞬間、まるで立ち眩くらみを感じた時のように部屋が急に薄暗くなった気がした。慌てて札入れをポケットに戻したカズミは、顔を上げて部屋を見回し、ひっと小さな悲鳴を上げた。部屋の入り口に若い女が立っていて、こちらを見ているのに気づいたからだだった。

「ああ、びつくりしたあ！」思わず両手で胸を押さえる。

女は立ったまま、カズミの反応を見て困ったように薄笑いを浮かべている。驚きがおさまると猛烈な怒りが湧いてきた。

「ちょっと、あなた！　ここで何してんのよ」

女はしっと唇に指を当て、共犯者の顔でバスルームを見る仕草をした。金ボタンが左右に並んだ黒のミニドレスを着ている。O形に湾曲した細い足に、馬のひづめのような分厚い底のショートブーツ。カズミと同様、茶色に染めた長い髪を背中に垂らし、前髪はミストで固めている。カズミは床に落ちているバスタオルを素早く体に巻き付けると、声を潜めて問い詰めた。

「あなたどこから入って来たのよ！　早く出てってよ」

女は謝罪するように片手を挙げた。長い爪にはゴールドのマニキュアが施されているが、その先端は醜く剥はけかけている。

「ね、どっから入って来たって聞いてんのよ」

「開いてたのよ」

ほそつと低い声で答え、入り口のドアを指さす。

「あたしが鍵閉めたから覚えているもの。絶対に入れないわよ」

「そう？ でも、チェーンかけてなかったでしょ」

女はそう言っていて、男のジャケットがかかったソファの背をふわっと掴んだ。合鍵でも使ったのかとカズミは怖くなった。密室のはずのラブホテルの部屋に、勝手に忍び込まれたのではかなわない。

「強盗じゃないよね。ね、早く出てってよ」懇願口調になる。

「違うわよ。ね、あんた、今、客の名刺でも取ってやろうと思っただんでしょ」女は訳知り顔をして、肩にかけて大きなシャネルバッグからタバコを取り出した。「わかってるんだって。それだけはやめたほうがいいよ。嫌な奴なら、身元調べなんかしないで関わり合いにならないようにさっさと帰ったほうがいいって」

「あんた出て行かないのなら、あいつに知らせるわよ」

「グルだと思われて、酷い目に遭わされるかもよ」

「まさか」

「貧相な男だって、びっくりするほど強い力出すよ。これまでに思いっきり殴られたことある？」

「なに」

「だとしたら、あんたは運がいいんだよ」女は混乱したカズミの顔を見た。「ほんと、運がいい」